

福祉だより

上豊富地区
福祉推進協議会
H29.12月発行

全ての人の幸せを

上豊富小学校

校長 塩見

本年度四月より本校校長として赴任しました塩見です。平成二十四年・二十五年の二年間教頭として勤務させていただきました本校に四年振りに戻ってきてワクワクしながら勤務しています。日頃は、本校教育推進に各方面からご協力ご支援をいただいておりますことに衷心より感謝申し上げます。現在本校児童百名毎日元気に学校生活を送っています。

さて、私の子ども時代は、毎日薪を使ってお風呂を沸かすのが仕事でした。旨く燃やせなくて時間がかったときに「ありがう。」の家族の一言で心が落ち着いたものです。現在はスイッチを押すだけで快適な温度のお湯がきちんと決まった量です。このように生活が便利になり子どもたちのお手伝いも無くなってきているのが実情ではないでしょうか。でも、日々忙しい生活であるからこそ子どもたちにはきちんと家族のためになる役割を持たせてほしいと思います。人は人の中で育

ちます。失敗したり、誉められたり、叱られたり…いろいろな経験が血となり肉となります。将来の軸に育っていくと信じます。

本校の子どもたちは、とても子どもらしい子どもたちです。家族や地域の中できつと大切にされ温かく見守られているからだと感じます。今後、地域の宝である子どもたちの成長を見守っていただけたら幸いです。

同じように地域にはお年寄りもたくさんお住まいです。お子さんやお孫さんがおられなくても機会あるたびに学校入足を運んでいただき、子どもたちに元気を分けていただけると嬉しいです。

毎日、楽しいと実感できる生活を送ることが生き生き生きる源だと思えます。

今後ますますの上豊富地域の発展を祈念いたします。

ふれあい餅つき大会



民生児童委員 大槻

豊富の山々も紅葉に染まり、肌寒さを感じる季節になりました。

十一月十二日、上豊富地区文化祭とともに、「ふれあい餅つき大会」が開催されました。前日から雨を心配していましたが、当日は、曇り空、雨に降られることもなく行うことが出来ました。ひと日がつき上がるころから、皆さんお見えにな

り、屋前にはテントの中は満席になりました。献立は、寒い季節に温まる甘いぜんざい、変わらぬおいしいさきな粉餅、大人の味大根おろし餅。配膳が追い付かず、待ちが出来る繁盛ぶり。家族でお見えの方、久しぶりに会った旧友、子どもたち、テントの中は話題でいっぱい。



その横で大人と一緒にベッタソ。「よいしょ」の掛け声たかく。杵を振り上げよるける小学生、一所懸命つきました。なんと、十日つきました。よい思い出してくださう。

遠い昔、私たちが子どものころ年末になると、隣近所から餅つきの音が聞こえてきたものです。朝早くからかまどに火をおこし蒸籠でもち米をむし、餅をつく。家族一緒になって正月を迎える準備をしました。時は流れいつしか、杵と臼が電気餅つき機に変わり今では「餅つき」さえ見かけなくなりました。

正月にはなぜ餅を食べるのか。こんな話も聞きました。正月は歳神を迎え、精動を約束し、同時に一年の幸福をお願いする重要な時。餅は、まさに歳魂。それを食べるのは神様から、新たな命を頂くということだそうです。

後になりましたが、PTA役員、子ども会役員、紫豊館、自治会の皆様には、前日の準備から後片付けまで大変お世話になり、おかげさまで大きな行事を終えることが出来ました。

もつすぐ一年になる福祉

民生児童委員 平出

「普通に生きる」という映画がある。初めて三年前の八月三十一日に上豊地区にチラシを撒いて上映会を催したが、参加者は少数だった。障害者、知的障害者のサポート施設を、その両親らが中心に活動して作り上げたトキユメンタリー映画である。静岡県で十数年前から撮り始められたこの作品に出会ったのは、若い頃の演劇友達からの偶然の紹介だった。福知山で何か有益な活動が出来ないかと、お寺で秋に「演劇の夕べ」をはじめたりしていた。

一昨年父を九十三才で見送った。今は母がもうじき九十一才を迎える。両親を家族が見守り、送ることが特異な事例なのだと思最近思う。介護施設に親を入居させる家族を誰も責められない。認知症を発症してしまった親に大声で怒鳴ったり怒ったような話し方をする人を、どうやって助けてあげれば良いのかわからない。しかし同じ悩みを抱えている人が他にも沢山いる事をどうにか知ってほしいとも思う。家族が見守りを続けられる環境を整えられないだろうか。

今年の夏、上豊地区福祉推進協議会で福知山学園むとべ翠光園、みつみ福祉会三愛荘の見学研修を行い、発達障害、知的障害のケ

アについても多くの説明を受けた。行政区分では発達障害も成人になるとどこも引き受けられなくなる。「命を大切に」と標語を掲げながら「命を育てる」ことには無頓着になっている。高齢者介護施設については参加者から「入居したい」という感想さえあった。体の自由が利かなくなったら「ホーム」で老後を楽しみたいというのは当然の権利だと思う。実際は死ぬ直前まで介護保険を払い続けて、子供に面倒をかけたくないとお墓まで自分で用意する「終活」といった人生を考え、実行しようとしている高齢者が多い。

人生の多くを社会に還元して来た高齢者の多くが見返りのない終着場に向かっていように見えてならない。



支え

民生児童委員 矢之

私達は、互いに支え合いながら日常生活を送っています。身近なところでは、家族や友人に支えられ、またそれらの人々を支えています。また、職場の人々や地域の方々にも支えられ、支えながら日々の生活をしています。

例えば、家族や友人が病気やけがをしたと

きに、病院に連れて行ったり、職場の同僚が仕事を休まなければならなくなった時、自分のできる範囲で業務を代わりにする事も支えになるでしょう。

しかし、近年「無縁社会」や「孤独死」といった言葉が、社会的な注目を浴びるようになりました。これらの言葉から、現代の社会において、人と人とのつながり、「支え合う人間関係」が希薄化している事がわかります。

また、一方では、東日本大震災を経験して以来、「絆」という言葉が聞かれるようになりました。

このように考えると、私達の支え合う人間関係は、様々なつながりの中「地域、家族、会社」で機能していると言えるでしょう。このような中、少子化、高齢化社会において、地域の方々との支え、交流が重要になるのではないのでしょうか。

今後、多くの家庭を訪問し地域住民の方々の現状を肌で感じ、信頼関係を築き地域包括センター・社協などとの連携を深めながら、地域の皆様と支え合い、安心して暮らせるまちづくりが出来ればと思います。福祉活動に努めてまいります。

